
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 29

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 561. 複雑性と人間発達: Netlogoを活用したシミュレーション実習
- 562. 書籍の執筆について
- 563. 待ちわびて
- 564. 探索とゆとりについて
- 565. 構造的発達心理学の二大巨頭: ロバート・キーガンとカート・フィッシャーについて
- 566. 後継者として
- 567. カート・フィッシャーとポール・ヴァン・ギアートの仕事を辿りながら
- 568. 何気ない日常より
- 569. 「トランスパーソナル防衛メカニズム」の集合的蔓延
- 570. デュッセルドルフに住む友人より
- 571. 存在することの不思議な感覚
- 572. ジャン・ピアジェの発達思想より
- 573. 孤島と連絡船: 能力開発に対する視点
- 574. 構成的感覚
- 575. ピアジェの構成的知性発達モデル
- 576. 建築家のように
- 577. 推測的理論の検証のためのダイナミックシステムアプローチ
- 578. ポール・ヴァン・ギアートの背中を追いかけて
- 579. 理論モデルの構築について
- 580. 発達心理学者アネット・カミロフ=スミスの運命について思うこと

「複雑性と人間発達」というコースの第二回目のクラスについて、あれこれと振り返りを行っていた。毎回このコースに参加するたびに、多くの学びを得ることができるため、クラス後の振り返りの量がどうしても多くなってしまう。もちろん、これは嬉しい悩みである。

クラスの前半では、物理学者のラルフ・コックス教授から、ダイナミックシステムアプローチの数学的側面に関する概略的な説明があった。具体的には、「連続システム」と「離散システム」の違い、「微分方程式」と「差分方程式」の特徴、微分方程式を活用したモデル化、「状態空間 (state space)」、「アトラクター」の種類、「カップリング」、「線形写像」と「ロジスティック写像」、「バイファケーション (分岐点)」などの基礎的かつ非常に重要な概念について、明確な説明と共に理解を深めることができた。

理論的な講義が終わった後、小休憩を取り、後半は毎回楽しみにしているコンピューターシミュレーションの実習を行った。前回と同様に、博士課程に所属しているドイツ人の友人であるヤニックと一緒に演習を行っていた。本で行ったシミュレーション実習では、「Netlogo」というツールを活用した。Netlogoは、エージェント型プログラミング言語を基にしており、このツールを活用すれば、人間や組織などの自律的に行動する存在 (エージェント) の行動や相互作用をシミュレーションすることができる。

さらには、エージェント間の相互作用がシステム全体にどのような影響を及ぼすかも分析することができる。複雑系研究のメッカであるサンタフェ研究所が提供しているオンラインコースに参加していた時に、すでにNetlogoに触れていたことがあるため、このツールには少し馴染みがあった。とはいえ、このツールの応用範囲は広く、これから自分の研究の中で活用していくことを通じて、Netlogoに関する理解と技術を高めていきたいと思う。このツールは、無料でダウンロードすることもできるし、オンライン上で活用することもできる。仮に、人間や組織を自律的に行動する存在と見立て、その振る舞いや相互作用に関心があれば、このツールは非常に使いやすいのでお勧めである。

今回の実習内容は、Netlogoを活用したモデルの中でも一番有名である「捕食者・被食者の生体数変化モデル」を取り上げた。前回と同様に、ヤニックとあれこれ意見交換をしながら、お互いの仮説

と理論を基に、一つ一つのパラメーターの値を変えながら、捕食者と被食者の生体数の変化を観察していた。各自の仮説や理論通りにシミュレーション結果が出てくると、お互いに大いに盛り上がった。以前紹介したように、このクラスには博士課程に在籍している者やポスドクの者、さらには教授も何名かいる。実際に、私たちの前に座っていたのは、精神科医かつ心理学者のデ・ヨング教授であった。ヤニックと私が侃侃諤諤に議論しながら実習を行っており、その熱気が伝わったのであろうか、デ・ヨング教授の方から私たちのグループに加わりたい、という申し出があった。

ヤニックと私は間髪入れずに快諾し、そこからは三人でシミュレーション実習を行っていった。実習を行えば行うほど、時間の展開に応じて動的に変化する複雑性システムの挙動をシミュレーションすることに関して、Netlogoは非常に有効なツールだという考えが増していった。

今回実習で取り上げたのは、捕食者・被食者の生体数変化モデルである。イメージとしては、私たちが農場の経営者であり、農場の生態系を最適な状態に保つことが目的とされている。農場の中には、羊(被食者)と狼(捕食者)が存在しており、シミュレーション実習の前半では、農場に最初からいる羊と狼の数、羊の繁殖率、狼の繁殖率、狼が羊を食べることによって得られるエネルギー、という五つのパラメーターを扱っていた。

実習の後半では、羊の餌となる農場の草の成長率、羊が草を食べることによって得られるエネルギーという二つのパラメーターをさらに追加し、合計七つのパラメーターを基にシミュレーションを行っていた。このシミュレーション課題に答えていくだけではなく、このモデルを自分たちの研究テーマと関連付けてどのように活用するか、ということについても三人でディスカッションをしていた。捕食者・被食者の生体数変化モデルは、アイデア次第でいかようにも応用できると思う。

例えば、親を捕食者、子供を被食者と見立て、親の叱責を捕食行為とし、子供の行動矯正を被食行為と見立てれば、このNetlogoを用いることによって、その相互作用をシミュレーションすることが可能である。私の研究テーマに適用するのであれば、教師を捕食者、ある生徒を被食者、その他の生徒を牧草と見立てれば、それらの相互作用をシミュレーションすることが可能になる。Netlogoは大変奥深いツールなので、具体的な活用方法については、今後折を見て書き留めておきたいと思う。

562. 書籍の執筆について

今日も非常に仕事のはかどる一日であった。本日は、専門書や論文に目を通すことは一切なく、午前中は主に第二弾の書籍について構成案を考えていた。前作の『なぜ部下とうまくいかないのか』は、五つの章立てを決めた段階で、ストーリーの流れが自分の頭の中にあったため、章ごとの細かな内容を決めることなく、筆をうまく進めていくことができた。

しかし、今回の作品は、コンセプトと表現形式の都合上、大まかな構成を決めるだけでは不十分であり、どんな論点をどんな順番で盛り込んでいくのかを事前にしっかりと考える必要がある。これは、書籍の執筆のみならず、論文や企画書の作成にも当てはまる基本的な原則だと思うのだが、これまでの私はそうした作業があまり得意ではなかった。

これまでの私は即興的に文章を書くことが多く、このようなスタイルだと、本当に意味のあるものを生み出していくことはなかなか難しい。ライプチヒのバッハ博物館で目の当たりにしたように、バッハは作品を生み出す法則性、言い換えると、美を創出することの法則性を発見することの探究に従事していた。自身の探究成果から得られた法則性に基づくことによって、バッハは傑出した作品をあれだけ多く残せたのだと思う。まさに、今の私が取り組まなければならないのは、単に作品を残すことではなく、一人の表現者として、意味のある作品を生み出す規則性や法則性を自分なりに掴み、それを定式化させることである。

このような自分なりの作品創出理論のようなものがなければ、毎回の作品は単なる偶然の産物となってしまうだろう。さらには、自分の表現したいものが一向に深まることなく、同じ深度を常に巡回するような状態に陥ってしまうだろう。私にとってそれは、何としてでも避けなければならないことである。自分の仕事を深めることにつながらない創造行為は、ほとんど意味のないことだと思っている。こうした無意味な活動に資源を浪費しないためにも、毎回の表現活動の中で、絶えず作品創出の理論を洗練化させる試みに従事する必要がある。

今日の午前中に取り掛かっていたのは、まさにそうした試みの一環である。数時間の時間をかけることによって、作品の全貌を捉えることができるようになった。さらには、各章の細かな論点設定とそれらの流れを考えることによって、仮にこの作品を彫刻に見立てれば、彫刻の彫るべき箇所と彫る流れを掴んだと言えるだろう。

前回の作品は、一日に約20,000字ほどの一つの章を執筆すると決めて、その決まり通りに仕事を進め、五日で初稿を書き上げることができた。確かに、自分が設定した基準に基づいて、五日間集中的に執筆作業に取り掛かることができたのだが、細かな論点を事前に設定していなかったため、各章の論点とその流れを、毎朝執筆前に時間をかけて練る必要があった。

今から振り返るとかなり奇妙な執筆の仕方だと思うが、実際に各章のタイトルしか決めていないところから、その日の執筆を開始し、毎日一章書き上げていくことを行っていたのだ。それに比べて、今回は、すでに各章の細かな論点を設定し、何をどのようにどこに盛り込むのかも、現時点ですでに設定することができている。そのため、前作よりも、執筆が効率的に進むと期待される。他の仕事や大学院での研究やコースとの兼ね合いもあるが、現在の自分のエネルギー量を考慮すると、今回も一日に一章を執筆していくという心積もりでいる。

【追記】

第一弾の書籍『なぜ部下とうまくいかないのか』と第二弾の書籍『成人発達理論による能力の成長』の執筆プロセスを比較している面白い記事である。二つの書籍は、ここで書かれている通りに出来上がっていった。上記の日記を読むと、ある意味、組織的に文章を執筆していくことを志そうとしている自分がいることに気づく。つまり、事前に文章の構成を練り、その構成に基づいて建築的に文章を執筆することに重きを置いている自分がいることに気づく。だが、今の私はそうした方法よりも、より自然な形で文章を執筆することの方が自分にとっては望ましいと思っている。

構成的に文章を執筆していかなければならない科学論文の執筆に絶えず打ち込むことができているのは、より即興的に文章を執筆できる日記やその場で生じている内的感覚をそのまま曲として表現できる作曲の方がより魅力的な表現活動に思っているからかもしれない。思考や内的感覚を絶えずその都度表現していこうとする衝動は、自分の個性や特性と呼べるものから生まれているのではないかと最近思い始めている。呼吸をしようと思って呼吸をするのではなく、絶えず呼吸という実践を行う形で日記や作曲を行うことの方が、私の日々をより深く、より充実したものにしてきているのは間違いない。やはり私が行う主たる表現活動は日記の執筆と作曲なのだろう。フローニンゲン:2018/3/25(日)13:39

昨日は丸一日、何かをインプットするような作業に従事せず、時間の許す限りアウトプットの作業に従事していた。今日は、自己を対極に振り、午後からはインプットに多くの時間を充てたいと思う。

一つの大きな流れの中に自分がいるためか、ここ数年の自分では想像ができないくらいに、両者のバランスが最適なのだ。「バランス」というのも、なかなか奥が深い言葉である。私が今感じているバランスというのは、インプットやアウトプットがほぼほどの状態にある、というようなことを意味していない。それとは全く逆に、どちらも非常に極端な投入量でありながら、それらが新たな次元に存在する均衡点で落ち着くようになった、という意味である。

面白いもので、どうやら、自分の中にある「バランス」というものも、質的に変容するらしいのだ。自分がバランスと捉えているものが、どの次元にある均衡点なのかを今後も観察していきたいと思う。

今日から数日間、フローニンゲンの街は晴天に恵まれるようである。クネン先生との先日のミーティングで話題になっていたように、フローニンゲンの気温の変動性が高くなっていたのは、まさに次の安定的な状態に移る前触れだったのだと思う。つまり、冬に入ったかと思うような寒い日が続く一方で、秋らしさを残す少しばかり暖かな日が再びやってくるというような、変動性に満ちた天候状態は、本格的にやってくる冬を知らせる現象だったのだと思う。

実際に、明日からの最低気温はマイナスが続き、明後日の最低気温はマイナス五度になるそうだ。そのような厳しい寒さの中にあっても、今の自分の充実感が色あせることは決してない。こうした厳しい寒さそのものが、私の充実感の中に溶け込んでいくかのようなのである。今、自分が理想とするような環境の中で生活できることは、何にも代えがたい喜びである。

理想的な環境を見つけることは難しく、さらには、そうした環境に飛び込んでいくことも難しい。とにかく私は、厳しさを超えた厳しさを体現している環境を長らく求めていたのだと思う。そうした超越的な厳しさを持った環境でしか得られぬことや磨かれぬものがある、と知っていたからである。このような環境を見つけること、そしてそのような環境の中に自己を置く日がやってくるまで、数十年の月日を要した。

自分の中で、ここからようやく何かが始まるのだということを感じる。そうした到来感と共に日々の生活を送っているのが、今の私の姿なのだと思う。明日からの本格的な冬の到来と、新たな自己の到来に対する待ち遠しさを味わいながら、今日もまたいつも通りに自分の仕事に取り組んでいきたいと思う。2016/11/26

564. 探索とゆとりについて

小鳥たちの美しい小さなさえずりが、早朝のフローニンゲンの静寂な空間の中にこだましている。早朝六時の真っ暗闇の中、小鳥たちのさえずりは、闇の中を進む存在にとっての道しるべのような役割を果たしているように思えた。

朝の八時に近くなってから、ようやく辺りが明るくなってきた。今日は、寒さの中にも暖かな太陽が差し込む土曜日である。土日の早朝に開催しているオンラインゼミナールを先ほど終え、私は一息ついてた。書斎の開放的な窓から見える景色は、常に私を支えてくれる大切な存在となった。自分を呑み込むような晴れ渡る空が、私の眼の前に広がっている。裸になった木々に、小鳥たちが休憩にやってくる。レンガ造りの家々の屋根に、冬のほのかな太陽光が当たっている。

そのような景色が、書斎の窓から広がっている。これらの何気なく、かつ常に新鮮な気づきをもたらす景色に対して、私はいつも包み込まれているような感覚を持っていた。だが、今日のこの瞬間は少し違った印象でそれらの景色を捉えていたのだ。これらの景色に呑み込まれている、包まれているというよりも、景色に包まれている自分と景色の双方を包んでいる自分がいることに気づいたのだ。この感覚は、以前どこかで味わったような気がしていた。

思い出してみると、それは今年の夏の欧州小旅行で体験したものであった。あれは確か、ハノーファーからライプチヒに向かっている列車の中での出来事だったように思う。ある瞬間に、景色を見ている自己が消え去り、私が環境の中にいるのではなく、環境が私の中の世界にいる、というような感覚に陥ったのである。こうした感覚は、自己中心的なものとは性質を異にしているだろう。実際に、目の前の景色が自己に他ならないとわかった時、自己中心的な考え方など湧きようがないように思うのだ。自己の存在が拡張していき、自己中心性が縮小していくというのは、おそらくこのような感覚のことを指すのだと思う。

このような感覚が少しずつ自分の中で育まれている背景には、やはり心のゆとりや時間的なゆとりのようなものが存在している気がする。そこからふと考えたことがある。全ての人には、各人固有の創造性や卓越性の種のようなものを持っているのだが、それらを開花させることがいかに難しいかについて、再び考えていたのだ。それらを開花させるために必要な対象を自分で発見し、自己の全存在をかけてそれに取り組んでいくことが、かくも難しいのはなぜなのかについて少し考えさせられていた。

そもそも、自己の全存在をかけるに値する対象を自ら見つけることは極めて難しい。この問題について考えている時に、私の論文アドバイザーであるサスキア・クネン教授のある論文をふと思い出した。クネン先生は、アイデンティティの発達を専門としており、アイデンティティが発達していく際には、自己を深めていくという「関与(commitment)」が重要になると述べている。これはアイデンティティの発達のみならず、どのような領域においても、そこで卓越の境地に至るには、関与が重要になる。

つまり、卓越の境地に至るためには、その領域に対する継続的な関与が重要になるということである。しかし、それは非常にありきたりな指摘かもしれない。そこで重要になるのは、「探索(exploration)」という概念である。アイデンティティが発達していくためには、自己を垂直方向に深めていくという関与が重要なのだが、関与の前に、自分は一体何者なのか、どのような領域で自己を深めていくのか、という探索が、実はまず求められることなのだと思う。

このような探索を十分することなしに、アイデンティティを深めていくことは非常に難しいだろう。ある意味、このような探索をしないというのは、目的地の定まらぬ中で、ひたすらに歩き続けているような状態だと言えるだろう。「探索」というのは、アイデンティティの発達のみならず、各人が持つ卓越性の種を開花させるためにも非常に重要だと思うのだ。現在の私は特に、成人期以降の知性や能力の発達を探究しているが、正直なところ、成人期前の生き方が、成人以降の発達に極めて大きな影響を与えるということを日々痛感している。

現代の多くの成人が、自己の全存在をかけるに値する対象を見つけることができていないのは、幼少時代に探索のゆとりを奪われていたからではないか、と思うのだ。ここではもちろん、ゆとり教育を手放しに推奨しているわけではない。だが、子供達に探索のゆとりを与えるという発想そのものは、

非常に重要なものだと思うのだ。ゆとり教育の政策がなかなか実を結ばないのは、結局、日本に依然として教育的な徴兵制度が頑なに残っているからだと思う。

ここで述べている徴兵制度とは、受験戦争に子供達が駆り出される現象のことを指している。子供達が徴兵されてしまうことによって、己が一体何者なのか、自分はどの領域で力を発揮することができるのかを真に探索する精神的・時間的なゆとりが奪われてしまっていると思うのだ。

人間が生涯にわたって発達していくためには、そして個人が自己の独自性を真に表現し、己の卓越性を磨いていくためには、何にもまして、このようなゆとりの中で子供時代を過ごすことが大事だと思う。それが子供の特権であり、発達の最重要要件であるようにすら思える。

565. 構造的発達心理学の二大巨頭:ロバート・キーガンとカート・フィッシャーについて

今日も非常に有意義な休日を過ごすことができた。午前中のオンラインゼミナールの後、仕事関係や交友関係の諸連絡を済ませ、予定通り、複数の論文と専門書に取り掛かることができた。今日の文献調査を通じて、改めて、元ハーバード大学教育大学院教授カート・フィッシャーは、偉大な発達科学者であると思う。もちろん、私はロバート・キーガンからも多大な影響を受けたことは間違いないが、キーガン以上に私に大きな影響を与えてくれたのは、間違いなくカート・フィッシャーである。

今からかれこれ三年半前、フィッシャー教授が引退をする前年、偶然にも彼の研究室を訪問させていただく機会に恵まれた。フィッシャー教授との対話の時間は、何にも代えがたいものであった。研究室訪問後も、折に触れてフィッシャー教授に連絡をし、発達科学に関して諸々の助言を受けてきた。フィッシャー教授は、私にとって良きメンターであったし、現役を退いた後も、彼が残した専門書や論文は、私にとってのメンターのような存在である。

発達科学者としてのフィッシャー教授の偉大さは、やはり、自ら構築した理論を、一生涯をかけて彫琢し続けたことにあるだろう。実は、フィッシャー教授の有名な「ダイナミックスキル理論」というのは、今から35年以上も前の1980年に誕生した「スキル理論」が原型となっている。フィッシャー教授の発達科学者としての生涯は、まさにこのスキル理論を彫琢し続ける過程であったと言ってもいいだろう。心理学の世界において、最も権威の高い専門ジャーナルの一つであるPsychological Reviewに投

稿された“A theory of cognitive development: The control and construction of hierarchies of skills (1980)”は、構造的発達心理学者にとって必読の論文だと思う。

非常によく知られたことかもしれないが、多くの科学理論が「最新」と呼ばれる形で専門家以外の人々に広く知られるようになる時、その理論は、当該研究領域ではすでに最新ではなくなっていることがほとんどである。なぜなら、そうした科学理論が世間で広く知られるようになるには、論文や専門書が出版されてから少なくとも5年から10年ぐらいのギャップがあるからである。キーガンの理論はようやく日本でも少しずつ知られるようになっており、斬新な発達理論として取り上げられているが、実際には、キーガンの理論の母体も1982年に出版された“The Evolving self”の時に出来上がっている。

2000年以降、キーガンは自身の理論の洗練化を行うというよりも、“Immunity to Change”のような具体的な発達支援手法を開発することに注力をしていった。キーガンもフィッシャーも、どちらも偉大な発達論者であることに変わりはないが、晩年のキーガンは自身の理論を実務へ応用することに力を注いでいたのに対し、フィッシャーは最後まで、己の理論体系を実証研究を通じて磨き続けていったという違いがある。そのため、キーガンの理論を最新の発達理論とすることは少し誤りがあり、逆にフィッシャーの理論は常に理論体系が磨かれていったという都合上、理論の鮮度を常に保っているものであった。知性発達科学の領域も、日進月歩で少しずつ進展しているのは間違いないが、やはりフィッシャーの理論は、今もその価値が色褪せることはない、と今日の文献調査で改めて感じた。

フィッシャーの引退から二年程が経つが、今この瞬間の私の感覚では、フィッシャーの理論は限りなく先端に近い場所に位置していると思う。発達科学の高みに到達したカート・フィッシャーのような人物をメンターに持つことができたことは、何よりも有り難いことである。彼の仕事の一步一步が、今の自分にとってどれほど大きな励みになっていることだろうか。フィッシャー先生から計り知れないほどの激励を受けながら、私も自分の仕事を少しずつ深めていきたいと思う。

発達科学者のカート・フィッシャーが残した功績について、まだ書き足りないことがあったようで、フィッシャーが発達科学に与えた貢献についてしばらく考え続けていた。特に、優れた理論が持つ応用力について考えを巡らせていた。ここで述べている理論モデルの応用力というのは、実務の世界で具体的に活用できるかどうかという力も当然含まれているが、それ以上に、その理論が科学研究の進展にどれだけ寄与することができるかの力のことを指している。

つまり、その理論に基づけば、どれだけ多様な研究が行うことができ、当該科学領域にどれだけ新たな知見を加えることができるのか、という力である。そのようなことを考えると、フィッシャーのダイナミックスキル理論は、非常に高い応用力を持った理論だと思う。ダイナミックスキル理論が持つ密度・強度・高度など、どれを取っても、一線級の科学理論であるように思えてならない。事実、私が今取り組んでいる研究で活用している主な理論は、まさにフィッシャーのダイナミックスキル理論であり、彼の理論がなければ、今の私の研究が成り立たないとすら言える。

私以外にも、知性発達科学の研究者たちの多くが、今もなお、フィッシャーの理論を活用しながら自分の関心テーマを探究し、当該領域に新たな知見を加えようと日々の研究に励んでいると言える。残念ながら、フィッシャーは数年前に引退をしてしまったが、彼が創造したダイナミックスキル理論は、フィッシャーの引退後も、さらに磨きをかけられていくのではないかと思っている。いや、より洗練させていくことが、多くの知性発達科学者に求められていると思う。

遡れば、知性発達科学の創始者に位置付けられるジェームズ・マーク・ボールドウィンや、知性発達科学に多大な影響を残したジャン・ピアジェの理論は、彼らが現役を退いて以降も、彼らの系譜を受け継ぐ者たちの手によって、理論が絶えず洗練されていったという歴史がある。疑いようもなく、フィッシャーもピアジェの研究に多大な影響を受けており、一時期は新ピアジェ派の代表的な人物であると言われていた。そこから、フィッシャーは、新ピアジェ派の発達思想を乗り越えていき、自分の理論体系をさらに洗練化させていったのである。

そして今、知性発達科学の研究領域では、フィッシャーの理論を受け継ぐ者たちが各々の専門分野の研究を進めている。私もフィッシャーの思想系譜を受け継ぐ一人として、彼が残した理論を活

用した研究を進めるだけではなく、ダイナミックスキル理論そのものをさらに洗練させていくことにも従事する必要があるだろう。おそらく、フィッシャー先生はそうしたことを望んでいるのだと思う。引退の前年に、フィッシャー先生の研究室に訪れた時、まさかその翌年に引退されるとは思ってもみなかった。

というのも、研究室訪問後のメールのやり取りで、私の研究のアドバイザー役を務めてくれることを快諾してくださっていたからである。当時の私は、明確な研究案もなければ、研究の能力も極めて低かったため、結局、フィッシャー先生に研究計画書を提出する日はやってこなかった。そのような過去を悔いることなく、先生の理論の恩恵を授かりながら、自分の仕事を深めていこうと思う。

一人の人間の仕事とは、永遠に完成しないものであり、常に道半ばなものなのだとつくづく思われる。何かを絶えず深めようという意志を持っている人間にとって、仕事を完成させる形で引退などできないのだ。そのような思いから、フィッシャー先生がやり残したことは一体何であったのかを意識しながら、今日の午後から夜にかけて、一心に彼が残した研究を辿っている自分がいたのである。

567. カート・フィッシャーとポール・ヴァン・ギアートの仕事を辿りながら

フローニンゲンの最低気温が本格的にマイナスに入り始めた。外気の寒さに反比例する形で、自分の内側の熱気が日増しに高まっているのを感じる。もはや自分の内面世界は、外面世界の表面的な変化に左右されることはない。内面世界と外面世界は、深層的な部分で深いつながりを持っているのは確かである。

しかし、今の自分の内面世界は、外面世界の表層的な現象に動じない形で、進化の歩みを進めているのを感じる。そのような感覚を持ちながら、早朝のオンラインゼミナールのクラスを終えた後、研究プロジェクトに取り掛かっていた。

昨日は、発達科学者のカート・フィッシャーが執筆した専門書と論文を一心不乱に読み耽っていた。このような集中的な読書を行うと、その日の夜に見る夢が、特殊な影響を受けながら、いつもとは毛色の異なる夢になることは面白い。昨日の午後はまず最初に、手持ちのフィッシャーの論文と

専門書を本棚から取り出し、とりあえず書斎の机の上に積み重ね、机に乗りきらないものは、食卓の上に並べるということを行っていた。

同時に、フィッシャーのCVを見ながら、彼が過去に執筆した全ての論文目録に目を通し、自分の研究に関するものの中で、自分がまだ入手していないものをチェックしていた。チェックのついた項目をもとに、大学の電子ジャーナルを通じて、それらの論文をダウンロードすることを行っていた。この電子ジャーナルは非常に便利であり、正規の大学に属していなかったこの三年間の間に読みたいと思っていた論文を、今このようにして自由に読むことができることはとても有り難い。フィッシャーが1970年に博士論文を提出して以降、引退をする2014年までの間に、執筆論文は300本を超えている。

そのうち、フィッシャーが筆頭著者を務める論文は、過去数年間の間にほとんど全て読むことを心がけていた。昨日の作業は、抜け漏れていた論文を発見し、それを読むことであった。フィッシャーの活動初期から晩年に至るまでの探究過程を辿ることによって、研究者として一つの体系を構築していくことが何たるかを教えてもらったように思う。フィッシャーの研究アプローチが洗練されていく過程、理論体系がより高度な構築物に変容していく過程、一つ概念や言葉が彫琢されていく過程を眺めれば眺めるほど、フィッシャーへの敬意が増すばかりである。

昨日だけでは、時間が足りなかったのも、今日も午後からフィッシャーの論文を読み耽っていた。フィッシャー同様に、知性発達科学の領域に多大な貢献を果たした元フローニンゲン大学教授ポール・ヴァン・ギアートの仕事に対しても、これから同様なやり方で彼の仕事の体系を掴んでいきたいと思う。

ヴァン・ギアートもフィッシャーと同じく、多産な研究者であり、彼が残した論文の総数も300本を超えていると思う。フィッシャーとヴァン・ギアートの仕事は、他の発達科学者の追随を許さない量と質を持っており、知性発達科学の専門性をより高めていくためにも、彼らの仕事とまずは真剣に向き合わなければならない。この作業は時間を要するものであるが、大きな励ましを得ることができるとともに、自分の仕事を確実に前に進めてくれることにつながっていると思う。2016/11/27

今日は早朝から、昨夜の就寝前に気にかかっていたことを調べる作業から仕事を開始した。昨夜、ダイナミックシステムアプローチに関する文献を読んでいた時に、そこで紹介されている発達の原理が、アメリカの思想家ケン・ウィルバーが提唱した「20の発達原則」と大きく重なることに気づいたのだ。

昨夜の就寝前、とりあえず書斎の本棚からウィルバーの傑作であるSESを取り出し、机の上に置いてから床についた。起床後、20の発達原則に関する箇所を丹念に読み解くことを開始した。ウィルバーが提唱する発達原則の中でも、例えば、「発達現象の創発性」、「階層的な発達」、「複雑性の増加」などは、ダイナミックシステムアプローチが強調する発達原理と通底するものがある。私は折を見て、ウィルバーの書籍を今でも読み返すことがあるのだが、未だに彼の発達思想からはいつも何かしら得るものがある。

もちろん注意を要するのは、ウィルバーの発達思想には、新ピアジェ派の発達研究までしか盛り込まれていないため、情報の鮮度が古い記述を時折見かけられることである。ウィルバーの発達思想には、近年の発達研究は一切盛り込まれていないが、彼の思想の真髄の部分が色あせることはない。今朝改めてウィルバーの書籍を読み返して、そのようなことを思った。

ウィルバーが提唱した20の発達原則を再度確認したところで、書斎の窓から目の前のストリートを見ると、昨日はどうやら雪が少々降っていたようだ。レンガ造りの家々に並行する形で、ストリートの路肩に何台かの車が停められており、それらの車の上に雪が少し積もっているのを確認した。

今日の最低気温はマイナス五度であり、午前九時現在の気温はマイナス二度である。いよいよフローニンゲンの街も本格的に冬に突入したのだと知る。それでも今日は晴天であるため、午前中の仕事がひと段落したら、ノーダープラントソン公園へランニングに出かけたいと思う。雲ひとつない晴れ渡る快晴が目の前に広がっている。

午後からは引き続き、ウィルバーが提唱した20の発達原則とダイナミックシステムアプローチが提唱する発達原理との比較を行いたい。その後は、発達科学者のカート・フィッシャーの論文を引き続き数本読み、木曜日に迫った「複雑性と人間発達」のコースの準備をしたいと思う。

次回のクラスでは、「状態空間 (state space)」を分析するコンピューターシミュレーションを実習で取り扱うことになっている。とりわけ発達研究では、時間という概念が鍵を握り、時間変数を盛り込んだグラフを頻繁に見かける。「状態空間グリッド」というツールを用いれば、時間以外の変数間の関係性を見事に分析することができる。このツールは、二、三年前から着目をしていたものであり、第三回目のクラスでこのツールを学習することができるというのはとても有り難い。木曜日のクラスに向けて、状態空間グリッドの概要とその活用方法に関する資料に目を通しておこうと思う。

569.「トランスパーソナル防衛メカニズム」の集合的蔓延

今日は、文句の付けようがない素晴らしい天気であった。午前中の仕事を終え、ランニングに出かけて心身をリフレッシュさせた。その後、午後からは引き続き、ケン・ウィルバーが提唱した「20の発達原則」について調査をしていた。

構造的発達心理学に馴染みのある人にとっては、もはや当たり前の概念かもしれないが、「ある発達構造が崩壊すると、その構造よりも上の構造は全て消滅するが、その構造よりも下の構造は依然として残る」という考え方について、少し立ち止まって考えていた。これは、ウィルバーが提唱した20の発達原則のうち、13番目の原則に該当するものである。背筋を登るようにしてふと生まれてきた一つの考えは、多くの日本企業や日本という国そのものが、この原則を犯しているのではないか、というものだった。

頻繁に耳にするのは、日本企業や国家から、能力水準の高い優秀な人財が流出し始めている、というものである。結局のところ、このようなことが起こっている背景の一つに、一定以上の能力水準を兼ね備えた人が存在できなくなってしまうような集合的な文化や仕組みがあるからではないだろうか。言い換えると、多くの企業や日本国家の中に、ある特定の能力水準を押し殺すような仕組みや文化が存在しているために、結果として、人々はそこから逃れようとする、という構造があるのではないだろうか。こうした構造は、間違いなく、その構造段階以上の人々を消滅させるものであり、その構造段階以下の人々を残存させることに寄与しているように思う。

そこからさらに厄介な問題は、こうした構造が単に、ある能力水準以上の人々を流出させているということのみならず、その組織や国家にいる人々の発達を阻害しているのではないか、ということであ

る。先日、精神分析学と複雑性科学を架橋したある専門書を読んでいた時に、「トランスパーソナル防衛メカニズム」という概念と遭遇した。これは、イギリスの精神分析医イサベル・メンジーズ(1917-2008)が提唱したものである。この概念の根幹の意味は、私たちの意識が高度化し、自己を超え出て行くトランスパーソナル段階に至る際に、私たちがそこへ行くことを無意識的に拒絶するような防衛反応のことを指す。

私たちは、次の発達段階に到達してみなければ、その段階がどのようなものかを実際に体験することはできない。とりわけ、自己を超え出て行くトランスパーソナル段階というのは、多くの人にとって未知なるものであり、未知なるゆえの恐怖すら引き起こすような段階だろう。そのため、私たちがそうした極度に高度な意識段階に踏み出していくことを無意識的に拒否する性向を持ち合わせている、というのは納得がいく。実は、こうした防衛メカニズムは、何もトランスパーソナル段階という非常に高度な段階に到達する前に発生するものではなく、どの段階においても発生するものだと思う。

私たちは、こうした防衛メカニズムと向き合い、それを徐々に乗り越えていく形で、次の発達段階に到達していく。しかし、多くの日本企業や日本という国家の中には、こうした防衛メカニズムを過度に強化するような文化や仕組みが存在しているのではないか、と思ったのだ。これはまさに、上記の問題と密接に関係している。もしかすると今の日本では、ある特定の段階以上の人々が組織や国家から流出していく動きと、そこにとどまる人々の発達が停滞している現象が起きているのではないだろうか。そして、こうした現象の裏には、ウィルバーが提唱した20の発達原則のうち、13番目の原則が侵されているからなのではないか、と思わされた。

570. デュッセルドルフに住む友人より

昨日10年ぶりに、大学時代から付き合いのある、ドイツ人の友人と連絡を取った。実際には、私がオランダで生活を始めるに際して、隣国のドイツに住んでいるその友人に数ヶ月前にメールを送り、彼からの返信をそのままにしていた、という事情がある。

昨日、二ヶ月半前にもらった彼のメールに対して、ようやく返信することができた。彼は私よりも五歳くらい年上なのだが、今ではもう、子供が二人もいるそうだ。大学時代には、私は何人かの留学生と交流をしていたが、一番仲が良かったのは間違いなく彼である。お互いにサッカーという共通の話

題があったため、彼とは頻繁にサッカーの話をしていた。さらには、二人とも経営学科に所属していたこともあり、経営理論に関する話もよくしていたのを覚えている。

彼は大学院で、特にマーケティングを専攻しており、卒業後、名門コンサルティングファームに就職することになった。彼への返信メールを書きながら、大学時代の思い出が少しばかり蘇ってきた。特に、彼が山口県の私の実家に宿泊に来た時、山口県近郊を観光したことがとても懐かしい。

山口県東部の岩国市にある、錦帯橋と岩国城を案内し終えた時、彼から、「ヨウヘイ、今から宮島に行こう！」と夕暮れ前の岩国城で提案を受けたことを今でも鮮明に覚えている。当時の私は、山口県の岩国から広島県の宮島が目と鼻の先にあることを知らなかった。彼からの提案のおかげで、私は生まれてはじめて、広島県の宮島を訪れたのだった。夕暮れ時の宮島で見た、厳島神社の何とも言えない力を放っている赤い鳥居の存在が、今でもまぶたに焼き付いている。あれから10年経ったというのに、まだ記憶が鮮明なのはとても不思議である。そのような思い出を共有した友人が彼である。

現在、彼はドイツのデュッセルドルフに住んでいる。地図で調べてみると、オランダのフローニンゲンからデュッセルドルフまでは、それほど遠くないことに気づいた。今年の八月に訪れたライブチヒヤシュツガルトとは、比べ物にならないほど近くにある都市だとわかった。とても有り難いことに、「ゲストルームがあるので近々遊びに来てくれ」と招待をしてもらった。10年ぶりの再会が今から待ち遠しい。デュッセルドルフへの訪問がどの時期になるのかまだ定かではないが、そのついでに、旧西ドイツの首都であったボンに是非とも足を運びたいと思う。

デュッセルドルフとボンは非常に近く、ボンには、敬愛する音楽家の一人であるベートーヴェンの博物館がある。この博物館には是非とも訪れたいと前々から思っていたので、ボンにも滞在したいと思う。欧州内では、基本的に飛行機を使わず、列車で移動することを心がけているので、再びフローニンゲンから東回りで移動をしたいと思う。ボンで一、二泊した後に、ベルギーのブリュッセルに数日間滞在し、フローニンゲンに戻ってこようと思う。

この欧州小旅行でも、きっと何かが自分の内側で起こるのだろうと予感している。以前の欧州小旅行で旅に付け加わった新たな意味——旅に伴う侘び寂び——が、どのような変化を遂げるのか、大い

に気になる場所である。新たな意味が、何も付け加わることがないかもしれない。あるいは、さらに新たな意味が付け加わるかもしれない。新たな意味が付け加わる日に向けて、今日も歩き続けていく必要があるだろう。

【追記】

デュッセルドルフに住むその友人のところへはまだ訪問ができていない。彼と彼の家族に会いに行こう行こうと思っているのだが、なかなか十分な時間を確保することができずにこれまできた。「デュッセルドルフに来た際にはブンデスリーガを見に行こう」と彼から嬉しい提案を受けているのだが、もしかするとリーグが終わってしまった時期の訪問になるかもしれない。10年振りに彼と会うことは私にとってとても楽しみであり、デュッセルドルフに行くついでにベートーヴェンが生誕したボンにも滞在しようと思っている。四月はポーランドとハンガリーへの訪問があるため、デュッセルドルフに行くことができるのは六月か七月だろうか。いずれにせよ、欧州にいる間に彼の元へ足を運び、旧交を温めたいと思う。フローニンゲン:2018/3/25(日)14:32

571. 存在することの不思議な感覚

早朝の四時から仕事を開始し、気づけば夜が明けていた。少しばかり足元が冷えると思っていたら、外気がマイナス七度であることがわかった。今日も昨日同様に、雲ひとつない晴れ間が広がっている。外の寒さを問題としていないかのように、小鳥たちが力強く空を舞っている。フローニンゲンの街に昨夜降った霜が、ストリートを優しく包んでいる。

その様子はまるで、スポンジケーキの上に優しく降りかかっている白いパウダーのようである。このパウダーは、赤いレンガ造りの家の屋根にも降りかかっている。そして、こうしたレンガ造りの家の上に架かっているのが、薄いブルーの雲ひとつない大空である。そのような景色を書斎から眺めることができる場所に、今の私は住んでいる。一週間のうち、ほぼ毎日、書斎の中で自分の仕事を行うか、書斎の窓から景色を眺めるか、ということだけを行っている気がする。

つまり、常に自分の内側と向き合うようなことと、内側から離れて外側と向き合うようなことしか行っていないようなのだ。興味深いのは、自分の外側にいくら焦点を当てても、結局のところ、やはり自分の内側に戻っていくのである。とはいえ、外側の事物の存在を認めないような極端な観念論に陥っ

ているわけではない。なぜなら、外側の事物に触発される形で、自分の内側が動き出しているのは、確かな感覚として感じ取れるからである。

昨夜、「生きていること」に対する不可思議な体験をした。これは以前どこかで言及したように、周期的に自分の内側に訪れる体験である。「生きていること」に対する不可思議な感覚を言い換えるなら、「存在していること」に対する不可思議な感覚と述べていいかもしれない。私は、この感覚を「存在の消失体験」と捉えている。これは、自分が自分だと思っている存在が溶解し、ひとつの大きな総体の中に還っていくかのような感覚なのだ。最近になってようやく、自己が自己を超えていくというのは、このような感覚のことを言うのだと思った。

こうした存在の消失体験—あるいは自己超出体験—をするときは決まって、覚醒中の自分が線引きをしている自己の境界線を越えていき、不思議な自己感覚を伴う世界に入っていく。厳密には、そこではもはや自己感覚というものはなく、自分が一つの大きな総体である、という感覚しかないのだ。この感覚から日常の自己意識に戻った後、ふと、五年前や十年前の自分を思い出すという現象が起こった。内面世界と外面世界の両方において、あの時の自分では想像もつかないような場所に今の自分がいることに対して、可笑しくなってしまった。

こうした外面世界の中で、このような内面世界を開拓している自分など、想像しようもないことであった。人間の人生や発達というのは、つくづく想像を遥かに超えた形で展開されるのだと思った。であるならば、これからの五年や十年というのも、きっと自分の想像を遥かに超えたものになるような予感がしている。ここから再び、午前中の仕事に取り掛かりたいと思う。昨日のように、これまでのように、変化の只中において自分の仕事や生活を継続させていくことが重要だ。

572. ジャン・ピアジェの発達思想より

今朝はいつもより早い四時に起床し、早朝からジャン・ピアジェの発達思想に触れていた。多くの方は、ピアジェを発達心理学者とみなすかもしれないが、それは少々誤解がある。もちろん、ピアジェが発達心理学に果たした貢献は非常に大きいですが、彼は発達心理学の領域を超えた探究を行っていたのである。一部の専門家から、ピアジェは認識論者であった、とみなされる所以はそこにある。

一言で述べると、ピアジェは、人間という存在とは知識を構築する有機体とみなしていた。発達心理学者のロバート・キーガンが「人間は意味を作ることを宿命づけられた存在である」と述べていることと同様に、ピアジェは「人間は知識を構築することを宿命づけられた存在である」と述べていたと言っても過言ではないだろう。

ピアジェは元々、生物学者としてキャリアをスタートさせたこともあり、環境の中で生じる人間の行動に着目しながら、それらの行動がどのように組織化され、時間の経過に合わせてどのように再組織化されていくのかを探究していた。とりわけピアジェの発想で面白いのは、知識を継続的に発達する人間の器官の一つとしていたことである。生物が進化を遂げていく際に、環境に適応しながらその器官を形作っていたのと同様に、人間の知識は、環境に適応しながら新たに形成されていく一つの器官なのである。

ピアジェのこうした発達思想に触れていると、私がオランダに来てから、どうして自分の知識体系の色と形が変わってきたのかがわかった。私たちの知識体系は、思考と密接に関係していることにはそれほど異論がないだろう。ピアジェも指摘しているように、知識が組織化されるためには、その環境内に適応するための思考が要求される。私は、オランダという新たな環境に適応するために、特殊な思考を余儀なくされていたのだと思う。

これはどのような環境においてもそうだろう。新しい環境に私たちが飛び込む時、そこでは必ず、その環境への適応が強いられる。その時に、私たちの思考はこれまでにない形で機能し始める。言い換えると、思考に新たな機能が付け加わることによって、その環境に適応することができるのだ。もちろん、新たな環境が既存の環境とそれほど違いがない場合は、ピアジェの言葉を用いれば、単なる「同化」が起こる。

これは、思考の枠組みが大きく変わることなく、既存の思考の枠組みで新たな環境に適応していく方法を指す。一方、新たな環境が既存の環境と大きく異なれば異なるほど、思考の枠組みを一新させることが要求される。これがまさにピアジェが言う「調節」である。オランダの地へ降り立って以降、私の思考の枠組みが変容したように感じていたのは、まさにこうした新たな環境への適応が背景にあったのだと思う。

さらに、思考の枠組みが変容することによって、思考が感情に与える影響が変化し、感情が知覚に与える影響も変化していることに気づく。そして、知覚の変化が感情の変化を生み、感情の変化が思考の変化に影響を与えるという循環構造が生じているように思う。新たな環境の中で、自分の内側で非常に動的な循環が起こっていることに気づく。こうした循環的な構造が、いかに私の知識体系の構築に作用しているのかは、もはや歴然としたことである。

【追記】

知識体系の構築に関して非常に興味深いことを指摘していると改めて思った。自分の知識体系、そして思考の枠組みは、まさにオランダという地に適応する過程の中で新たに育まれていったことを知る。ここからまた私が環境を変えようとしているのは、もしかすると新たな知識体系と思考の枠組みを構築することをこの世界から求められているためかもしれない。仮に新たな環境で生活を始めることになれば、また今とは質的に異なる知識体系と思考の枠組みが構築されていくだろう。フローニンゲン:2018/3/25(日)16:42

573. 孤島と連絡船:能力開発に対する視点

やはり今の自分は、特殊な環境の中に身を置き、特殊な活動に従事し続けていることに気づく。正直な感覚は、孤島の中での生活に近いと言えるだろうか。このような生活を望んでいた自分が存在していたことは間違いない。また、このような環境に私を運んでくるような力が自己の背後にあったこともわかる。以前言及したように、どのような環境も固有の力を内包しており、それが私たちの発達を促進することもあれば、阻害することもある。

今私がいる環境は、紛れもなく自分の内面世界の成熟をもたらすものであると思っているが、その環境が持つ特殊性に対して、時に圧倒されることがある。さらには、こうした特殊な環境の中でしか育まれようのない特殊な力を獲得しつつある自分に対して圧倒されることがあるのだ。「自分が自分に圧倒される」というのは、一見すると奇妙なことだが、もしかすると、こうした感覚こそが、内側の発達が進行するときの偽らざる感覚なのかもしれない。今、私が生活している環境は、特殊な発達促進力のようなものを兼ね備えているように思う。

しかし、フローニンゲンの街が全ての人の発達を促すような力を持っているとも思えないのだ。この点が非常に不思議である。環境というのは、やはり私たちの内面世界と相互作用をしており、環境が私たちを形作るのと同時に、私たちの内面世界が環境を形作る、というフィードバック関係が存在しているように思う。今の環境を特殊なものだと認識する私の中に、特殊性の種のようなものがあり、それが環境に働きかけているようなのだ。その結果として、特殊な環境の中で特殊な能力が育まれている、という現象が偶然ながら起きているのだと思う。

こうした様子はさながら、自己の内面世界という生態系の中に、特殊な生物種が発生し、その生物種が日増しに進化しているような光景である。そして、その生物種の進化が生態系に影響を与えるのである。そのような比喩的世界は、まさに今の自分の内面世界とそれを取り巻く環境世界を見事に捉えているように思う。そのようなことを思いながら、カート・フィッシャーとポール・ヴァン・ギアートが執筆した共著論文“Dynamic Development of Brain and Behavior (2014)”を読んでいた。知性発達科学におけるこの二大巨頭の論文には、いつも感銘と励ましを受ける。

先日、私の論文アドバイザーであるサスキア・クネン教授は、「あの二人の共著論文はいつも面白い」と述べていたが、私もこの発言には完全に同意する。この論文では、ポール・ヴァン・ギアートが専門とするダイナミックシステム理論を活用したダイナミックネットワークモデルと、フィッシャーが専門とするダイナミックスキル理論が見事な関係を作っている。特に、領域全般型能力と領域特定型能力をダイナミックネットワークモデルの観点から説明した箇所が非常に参考になった。知性発達科学者の中には、全ての能力領域の根幹になるような領域特定型能力を特定することに心血を注いでいる者がいる。

しかし残念ながら、今のところ、そのような能力は発見されていない。過去の候補として、IQのようなものが取り上げられることがあったが、これは実証研究によって早々に却下されている。比較的最近においては、“g-factor”のようなものも候補に挙がっていたが、これも有力なものではないことがわかっている。つまり、全ての能力領域を架橋するような基盤的能力は存在しないのだ。

ただし、複数の能力領域を架橋する能力のようなものは仮設的に存在が認められつつある。例えば、科学的な思考力と数学的な思考力という二つの能力領域を架橋するものとして、例えば「推論能力」のようなものが存在しているかもしれない。あるいは、言語的思考力を司る複数の領域の間に、

「言葉に対する感性」のような能力が存在しているかもしれない。いずれにせよ、これらの領域全般型能力は、領域特定型の能力と結びついており、複数の領域をつなぐものとしての役割を担っている。

こうした説明を裏付けるものとして、能力開発において、ある特定の領域における能力を鍛錬した結果、能力水準は違えど、それが別の能力領域において発揮されることを経験したことがある人も多いだろう。こうしたことが起こり得るのは、複数の個別能力領域をつなぐ領域全般型能力というものが存在しているからである、というのは一つの有力な説明になりうるだろう。

その様子はあたかも、領域特定型能力という独立した孤島をつなぐための「連絡船」として、領域全般型能力が存在しているかのようである。また、言語的思考力に強く依存した哲学の領域で能力を発揮しようと考えた場合に、哲学の知識やその領域固有の思考方法に習熟することなく、言語に対する感性だけを磨いていても、いつまでたっても哲学の領域で能力を発揮することはできないだろう。

つまり、ある個別の能力を涵養したいと思う時には、領域全般型能力だけを磨いていても意味はなく、個別具体的な領域の中で、その領域固有の実践を積む必要があるのだ。こうしたことを無視する場合、その様子はまるで、個別の能力領域という島を育てたいと思っているのに、その島には一歩も足を踏み入れず、島と島をつなぐ連絡船にずっと乗っているようなものである。

フィッシャーとヴァン・ギアートが共著論文の中で何気なく示している図表を見て、そのようなことを思った。知性発達科学を探究してきたこれまでの過程を振り返ってみると、五年前の私は、ケン・ウィルバーやロバート・キーガンしかり、あるいは、日本でも注目を集めているビル・トーバートの発達モデルと触れる中で、意識の発達という現象を、どうも領域全般型能力として捉えているようなところがあった。

しかし、カート・フィッシャーの理論に触れることによって、領域特定型能力と領域全般型能力というものが存在しており、そこから領域特定型能力に焦点を当てるのが、ここ数年続いていたのである。そこから最近では、領域特定型能力と領域全般型能力の双方の存在と重要性を認め、それらが動的かつ有機的なネットワーク構造を持っている、と発想するようになってきている。

当該論文の中で触れられていた事例として、自閉症のケースがある。一般的に、自閉的サヴァン症候群の人が、ある個別の能力領域で際立った能力を発揮し、その他の領域では、全く能力を発揮できないケースというのも、上記の考え方で上手く説明できるように思う。つまり、彼らは、他の能力領域をつなぐ連絡船の役割を果たす領域全般型能力がうまく機能していないか不在であるため、一つの領域特定型能力という島の中で生活することを余儀なくされているのだ。その結果として、一つの島で開拓され続けた能力は、一般の人々が想像できないような高度なものになるのである。

このようなことを考えながら、再度自分に引き戻して考えていた。自分が今どのような島や島々で生活をしているのか、それらをつなぐ連絡船とは一体どのようなものかを、引き続き考えていく必要がありそうだ。

574. 構成的感覚

早朝から昼にかけて、仕事が大変はかどった。米国のアマゾンに注文した専門書と異なるものが昨日届けられたため、午後一番に、それを返品するために近所の郵便局に出かけた。それにしても、オランダに到着してから、アマゾンを経由した注文に紛失などの手違いが多いことは残念である。今回注文した書籍は、ダイナミックシステムアプローチを幼児の身体運動の発達に適用した第一人者であるエスター・セレンとリンダ・スミスが執筆した“A dynamic systems approach to development: Applications (1993)”だったのだが、間違って同著者の“A dynamic systems approach to the development of cognition and action (1994)”が届けられたのだ。

後者の書籍は、二年半前にすでに購入しており、成人以降の知性発達現象にダイナミックシステムアプローチを適用する際にも有益な洞察を多数含んでいるものである。今回注文した書籍も非常に楽しみにしていただけに、今回の一件は残念だ。懲りずにもう一度他の書店に注文しようか迷ったが、オランダで生活を始めてから、アマゾンで注文した書籍が届かないということが、すでに四、五回起こっているので、結局注文することを止めた。

その代りに、大学のオンラインジャーナルを活用し、幸運にもE-Book形式でダウンロードすることができることを発見した。いつも自分が本当に必要とする専門書や論文は、必ず紙媒体で入手するようにしているため、今回もE-Bookをダウンロード後、特に注目をしている著者の論文のみを紙で印

刷することにした。その後、自宅の書斎であれこれ調べ物をしているうちに、すっかり日が落ち始めていることに気づいた。書斎の窓からストリートを見渡すと、早朝に積もっていた霜がまだ残っていた。

今日は朝から雲ひとつない快晴であり、夕方の現在においても、フローニンゲンの空は綺麗である。地平線に近い空が薄赤く色づいている。その上を複数の飛行機が飛び交い、飛行機雲を残している。今日の天候の影響からだろうか、飛行機雲がいつもより短く、白い人魂が天空を行き交っているように思えた。そうした景色を眺めながら、昨日体験した不思議な感覚について考えていた。この感覚を端的に述べると、すべてが一瞬の時の中で、自分の内側で再構成されるような感覚である。

これは、完全に自己が生まれ変わる感覚ではないのだが、自分の内側の思考・感覚・体験などが、新たなまとまりを生み出し、その新たなまとまりが自己の中に構成されていることに気づいている、という感覚だ。これは非常に明晰な感覚であり、他に表現しようがないように思う。私たちの知性の発達の核に、構成的な特徴が備わっていることをジャン・ピアジェが指摘していたが、まさに自分の内側で何かが構成される瞬間に立ち会っているかのような感覚であった。

これは、内面現象が次々に新たなものに構成されていくプロセスとの邂逅であると言ってもいいかもしれないし、また、構成的な発達現象の原型を直視・体験していたと言ってもいいかもしれない。いずれにせよ、このような現象が自分の内側で確かに生じているのだ、ということに気づけたことは大きな発見であった。さらに、知性発達科学における諸々の概念や理論が、単なる観念的な虚構の産物ではなく、肉感の伴った構築物であることに改めて気づけたことも大きい。知性発達科学の世界に参入してから、まだ五年しか経っていないが、概念や理論が実体験の伴ったリアル以上にリアルなものとして、自分の内側に流れ込み始めていることを嬉しく思う。

これからの自分がやるべきことは、こうした感覚の流入を遮ることなく、逆にそれらを促し続けていくことにあるだろう。再び、書斎の窓から空を眺めた。人魂のように見える飛行機雲が、無数に天空を行き交っている。その中でもひときわ私の注意を引いたのは、二つの飛行機雲が一つの中心点に向かって進んでいる姿であった。二つの魂の統合の先に、新たな魂があるにちがいないと思わずにはいられなかった。

今日は、ほぼ一日中、ピアジェの発達理論と向き合っていた。ピアジェの生誕の地であるスイスのニューシャテルを訪れて以降、ピアジェの存在がより近いものになっている気がする。

私自身の知性発達科学に関するこれまでの探究を振り返ってみると、ピアジェの理論について学ぶよりも、新ピアジェ派と呼ばれる研究者たちの理論について学習することが多かった。その大きな理由の一つとして、知性発達科学の探究を始めた時の私の関心は、成人期以降の発達にあり、ピアジェの理論では、成人期前の発達についてしか基本的に扱われていないためである。

もちろんピアジェは、成人期以降の知性に見られる「後形式的操作段階」についても提唱していたが、彼が行った具体的な研究というのはほとんど無い。これはよく言われることであるが、発達心理学に多大な功績を残したピアジェを発達心理学者という枠組みで括ることは、少し乱暴であるように思われる。実際に、ピアジェは自分自身のことを発達心理学者とは見なさずに、「発生的認識論者」と定義付けていたのだ。ピアジェを知性の発達を取り扱う哲学者だと捉え、その書籍を読んでみると、いくつもの面白い発見と出会うことができるだろう。

本日、改めて面白いと思ったピアジェの理論モデルは、「構成的知性発達モデル」と呼ばれるものである。私たちの知覚を司る能力と概念を司る能力は、相互作用をしながら私たちの知性の発達に寄与している。しかし、ピアジェの指摘で面白いのは、知覚を司る能力が概念を司る能力を決定づけることはなく、概念を司る能力は質的(構造的)に変容し、それは知覚を司る能力を決定づけるほどの大きな影響を与えるというものである。

数年ぶりに同じ景色を見て、こうも印象が違うものか、という経験をしたことはないだろうか。そうした経験の背景には、ピアジェが提唱した上記の理論モデルが関係しているように思える。私自身も、数年ぶりに同じ景色を見たときに、これまでとは全く印象が異なる経験を何度もしている。これは何を示しているかというと、数年前の自分と比較して、今の自分の中で知覚の変化が先に起こったというよりも、概念を司る認識の変化が先に起こったと考えた方がいいだろう。私たちの認識の変化が、知覚作用に大きな影響を与えているのである。

私は渡欧する直前あたりから、日常目にするものを、自分の認識変容のマイルストーンとしている。オランダで生活を始めて以降は、自宅周辺の景色や大学の校舎などが、マイルストーンに該当する。これらの対象物に対する知覚的印象がどのように変化するかを、時折観察している。

フローニンゲンの街で生活を始めて以降、自分の内面世界がこれまでとは違う足取りで動き始めているのに気づいていた。その触媒になったのは、環境変化による知覚の変容だとこれまで思っていた。しかし、ピアジェの構成的知性発達モデルに今日触れたことによって、それが誤りであったことを知る。やはり、環境変化に伴い、真っ先に自分の内側で生じていたのは、概念を司る認識能力の方だったのだ。こちらの変容が先に起こっていたために、それが知覚の変容を生み出し、世界の捉え方が刷新されたのだとわかった。

576. 建築家のように

集中的な読書を行った日の夜の睡眠時間は、やはり普段以上に長くなっていることに今朝も気づいた。おそらく、九時間近い睡眠時間を確保していたように思う。奇妙なことだが、いつも就寝前に、自分の知識や経験の体系が少しでも深みを増すように願っている自分がいるのだ。こうした祈るような行為はおそらく、自分の内側の構築物の高度や堅牢性が、非常に取るに足らないものだという自分の思いから生まれている気がしている。

専門書や研究論文を読んでは何かを書き、何かを書いてはまた何かを読み、具体的な実務作業に従事しては何かを書き、何かを書いてはまた具体的な実務作業に従事する、というような生活を日々送っている。

私たちの内面世界に存在するものが深まり、高度化していくには、長大な時間を要することを頭では重々に理解しているつもりである。まさに、内面世界に生起する思考や経験、そしてアイデンティティなどが深まっていくプロセスとメカニズムを私は研究しているはずなのだ。しかしながら、自分に正直となり、私の内面世界の諸々の現象に着目してみると、それらが深まっていく速度に物足りなさを感じているのは確かである。つくづく、内面世界の現象の発酵過程は、忍耐強く時間をかけながら対象と向き合う必要がある、と感じさせられる。

忍耐と継続という要素が欠けたとき、内側の発酵過程はそこで終わりを告げる。忍耐強く継続的に対象と向き合い続けることができるかどうか、ということこそが発達的な試練なのだろう。

早朝、以前の自分の文章を読み返すことがあり、少しばかり愕然とさせられた。というのも、一つの対象について言葉を紡ぎ出していく際に、自分の語彙の貧困さや表現方法の多様性のなさを目の当たりにしたからである。今の私の目の前には、英語やオランダ語という他の言語をより高度化させていくということに加え、知性発達科学を取り巻く諸々の言語体系に習熟する必要がある、という課題が突きつけられている。それに加えて、自分の日本語能力をより確固としたものにしていかねばならない、という課題も浮上している。

明確に述べることができるのは、自分を取り巻く諸々の言語体系を彫琢することを放棄した瞬間に、内側の成熟過程はそこで止まる、ということである。これは大きな確信である。私たちは、自らが関与する言語体系を磨く努力を怠った時、必ず内側の成熟が止まる。そのような衝動的な想いが、自分の中に去来している。

もう一つ、自分の文章を見て愕然とさせられたのは、視点や観点の貧困さであった。そもそも言葉を用いて何かを表現する際には、視点や観点というものが不可欠な要素として求められる。そして、そうした視点や観点を作り出すものは、知識であり経験といったものだろう。ここから、自分の知識や経験の絶対量が圧倒的に不足していることに対して、真剣に向き合おうとする自分がいることに気づく。

昨夜就寝前の祈りに似た願いは、知識体系の確固とした構築物を内側に築いていくことに対してであったが、そもそもそうした構築物を作るための材料を獲得しなければならないのだ。何もないところから、必死に構築物を建設しようとしても無駄であり、まずはその材料を内側に獲得していくことから始めなければならない。昨日の集中的な読書は、そうした切実感からもたらされた行為だったのかもしれない。建築家が自分の生涯を捧げて、建築物を建設していく仕事に従事するのと同じように、私も一生をかけて、自分の内側の建築物を構築していきたいと強く願う。

この仕事に終わりはないということは、重々承知しているが、言語体系を彫琢しながら言葉を紡ぎ出していく作業と、知識と経験を心身に刻み込むことをしていかなければ、何も始まらないだろうし、何も生まれないだろう。そのようなことを朝から思わされた。

577. 推測的理論の検証のためのダイナミックシステムアプローチ

流れ星を眺めるかのように、今日という一日もあっという間に過ぎ去っていった。フローニンゲンで生活を始めてから四ヶ月が経つが、まだそれくらいの期間しか経っていないのか、という思いを持っている。メソな時の経過は比較的ゆったりとしたものに感じられるが、マイクロな時の経過はとても早く感じられる。

書斎の窓から見える景色が、その日を終える準備をし始めている様子が見て取れた。今日は、時折小雨の降る一日であった。昨日と同様に、今日も集中的に文献と向き合っていた。今日の文献調査は、自分の研究と直接的に結びついているものというよりも、間接的に自分の研究を下支えしてくれるようなものである。専門書や科学論文というのは、自分の関心に合致するものを探せば探すだけ見つかるものであるため、この作業に終わりはない。

研究者として、こうした作業を生涯にわたって積み重ねていく必要があるのだろう。文献調査と実際の研究を進めていく過程の中で、徐々に自分の知識体系が構築されていくはずである。ここ数年の間、特に注目をしていたのは、元フローニンゲン大学教授ポール・ヴァン・ギアートの仕事であった。ヴァン・ギアートは、カート・フィッシャーの長年の共同研究仲間であると同時に、ダイナミックシステムアプローチを発達科学の世界に導入した功績者である。

フィッシャーの執筆した論文に比べ、ヴァン・ギアートの論文には数式モデルが活用されることも多く、さらには、発達科学に関するメタ理論的な観点が盛り込まれていることが多いため、読み解くのはなかなか難解である。そうした事情もあり、特にこの数年間は、まずフィッシャーの論文を中心に読み、その後、フィッシャーとヴァン・ギアートの共著論文を読む、ということを行っていた。フィッシャーの研究論文を時系列でほぼ全て読むことに目処が立ったため、同じ作業をヴァン・ギアートの研究論文に対しても行おうと思っている。

今日は、ヴァン・ギアートの論文リストを眺め、まだ手元にない論文を全てダウンロードする作業をしていた。これから本腰を入れて、ヴァン・ギアートの構築した理論体系と思想体系を理解していきたいと思う。知性発達科学に関する自分なりの知識体系を構築する際に、ヴァン・ギアートとフィッシャーの仕事を避けて通ることはできない。

今日の午後、私の論文アドバイザーのサスキア・クネン先生の論文を読んで、大きな感銘を受けた。端的に述べると、ダイナミックシステムアプローチを活用した発達研究の可能性に対して、目を開かされるものがあつたのだ。そのきっかけを産んでくれたのが、“The art of building dynamic systems models (2012)”と“Development of meaning making: A dynamic systems conceptualization (2000)”という二つの論文である。これらの論文では、ロバート・キーガンの理論モデルに対してダイナミックシステムアプローチを適用し、その理論モデルを検証するということがなされている。

何に感銘を受けたのかというと、ダイナミックシステムアプローチのシミュレーション手法は、既存の推測的な理論モデルを検証する際に、非常に大きな効力を持っている、ということであつた。振り返ってみると、知性発達科学の世界に参入し始めた初期は、ケン・ウィルバーなどの、科学者ではない思想家の発達モデルに強い関心があつた。ウィルバーの発達モデルは、極めて射程が広く、かつ密度の濃いものであることは誰しもが認めることであろう。

しかしながら、注意が必要なのは、ウィルバー自身は決して生粋の研究者ではなく、彼の理論モデルには、実証研究でまだ解明されていないような推測的な記述が多数盛り込まれている、ということである。ウィルバーの発達理論と真剣に長く向き合うことによって、徐々に、推測的な記述の存在が浮き上がってきたのである。だが、そうした推測的な記述が多分に含まれていたとしても、全体としての理論モデルが依然としてこれほどまでに強力であることは、やはり目を見張るものがある。

ウィルバーは、自身のことを「物語作家」と述べていたが、まさに優れた物語作家だと思つづく思われる。その点に関して、「何かを語る」というのは極めて難しいことであると最近思う。実際に自分が知性や能力の発達に関して何かを説明する際に、その説明がどれほど実証的なものなのか、推測的なものなのか、ということを気にしている自分が少なからず存在している。ここで推測的なものを安易に排除してしまうことは、非常に大きな問題があるように思う。

最大の理由の一つには、推測的な理論が必ずしも誤ったものであるとは限らない、というものである。上記の論文で私が感銘を受けたのは、ロバート・キーガンの発達理論の中にも、推測的な理論モデル——例えば、葛藤量と発達段階の関係に関するモデル——が含まれているのだが、クネン先生が実証データをもとに、ダイナミックシステムアプローチを活用したシミュレーション検証を実施した結果、キーガンが提唱したその推測的な理論モデルが正しいことがわかったのである。

推測的な理論モデルの正誤を判断するのは非常に難しいため、このようにシミュレーションを活用した理論モデルの検証は、科学的な知見を進歩させていくことに大きな貢献を果たすと考えている。結局のところ、知性発達科学は何を明確に物語ることができて、自分は何を明確に物語ることができるのか、という問題はまだ解決していない。科学理論を創出することも難しければ、科学理論を正確に解釈することも難しい。科学を哲学的な探究対象とする「科学哲学」に関心を持ち始めている背景には、どうやら上記のようなことが関係しているのだと思う。2016/11/30

578. ポール・ヴァン・ギアートの背中を追いかけて

今日は、「複雑性と人間発達」の第三回目のクラスに参加した。今のところ、このクラスの前には必ず、友人の誰かとカフェテリアで一時間ほど話をしている。今日は、ドイツ人の友人であるヤニックと対話をしていた。学部時代からフローニンゲン大学で学んでいるヤニックは、この街で生活を始めてからすでに五年が経過しているとのこと。現在は、博士課程に在籍しているため、少なくとも合計で八年間はこの街で生活することになるそうだ。

私は高校を卒業して以降、同じ街に四年以上生活をしたことがないため、八年という月日を同じ街で過ごすことが、どのような意味と影響を私に及ぶのか想像がつかない。特に根拠はないのだが、この数年以内に、四年以上の時を過ごすことになるであろう場所が見つかるような気がしている。それが世界のどの街なのか、未だ定かではないが、候補地が幾つかあるのは確かである。知性発達科学の研究を進めるという観点であれば、今私が所属しているフローニンゲン大学はとても素晴らしい環境である。

複雑性科学の一領域であるダイナミックシステムアプローチを発達科学に適用した先駆者は、エスター・セレン、アラン・フォーゲル、マーク・レヴィスなど様々な研究者の名前を挙げることできる。だ

が、その中でも私が最も関心を惹かれたのは、フローニンゲン大学教授ポール・ヴァン・ギアートの仕事であった。ヴァン・ギアートは、形式上、昨年引退をしてしまったが、今でも共著論文を執筆するなど、引き続き学術探究を行っている。ヴァン・ギアートは私の論文アドバイザーを務めるサスキア・クネン教授などと協働することによって、「フローニンゲン学派」と呼ばれるダイナミックシステムアプローチを活用した研究集団を築き上げた。

その系譜は、今も途切れることなく息づいている。実際に、私のメンターであるルート・ハータイ教授をはじめ、フローニンゲン大学に所属するその他の発達科学者の研究には、ヴァン・ギアートが開拓した発達思想と研究手法が色濃く反映されている。ここ最近になってようやく、ヴァン・ギアートの初期から晩年にかけての仕事を時系列的に丹念に追いかけてみる、という作業を行っている。この作業を進めれば進めるほど、ヴァン・ギアートが構築した発達思想の深淵さに圧倒されるばかりである。

ヴァン・ギアートの関心事項と私の関心事項は多いに重なるため、彼が残した仕事を網羅的に辿っていくことは不可欠だと考えている。振り返ってみると私は、アメリカの思想家ケン・ウィルバー、構成主義的発達論者のオットー・ラスキー、発達科学者のカート・フィッシャーたちを含め、これまで集中的にある一人の人物の仕事を辿ってみることを必ず行っていた。

そうした作業は、研究者としての自分の仕事を行うための、基盤のようなものを形作ってくれると思っている。同時に、ある研究者の仕事を深く追いかけていくことは、自分の仕事を深めることに直接的に繋がっているとさえ思う。ここからしばらくは、現代の知性発達科学に多大な功績を残したポール・ヴァン・ギアートの仕事を深く追いかけることを通じて、自分の仕事を深めていきたいと思う。2016/12/1

579. 理論モデルの構築について

現在履修している「複雑性と人間発達」というコースは、毎回新たな発見を自分にもたらしてくれる。クラスでの学びを書き留めることが全く追いつかないほどである。また、クラスで取り上げられた内容について、自分なりに考察を深め、それらの内容を適切に消化していくという作業も行なっていく必

要がある。第二回と本日のクラスを振り返ってみたとき、以前言及した「捕食者・被食者の個体数増加モデル」について、再び考えを巡らせていた。

前回のクラスでは、このモデルを主に取り上げ、Netlogoというコンピュータプログラミングを用いてシミュレーションを行っていたが、モデルの意味をもう少しきちんと考えなければいけない。例えば、自分の研究とこのモデルを照らし合わせると、どのようなことが言えるだろうか。

現在私は、成人のオンライン学習を研究しており、学習者の概念理解度の発達プロセスを探究している。成人がオンラインを通じて何らかのコンテンツを学習するとき、一つの大きな目標としては、そのコンテンツに対する理解度を深めることにあるだろう。そこで、被食者の個体数を学習者の学習コンテンツに対するモチベーションと見立て、捕食者の個体数を教師の不適切な関与（モチベーションを下げるような説明などの振る舞い）と見立ててみる。

つまり、教師の不適切な関与——捕食者の個体数——が増えれば増えるほど、学習者のモチベーション——被食者の個体数——が減少していき、学習者のモチベーションが減少すればするほど、教師の不適切な関与が減少する、という理論モデルを想定してみる。このモデルの前半部分は直感的に正しいそうだが、後半部分は少し違和感があるだろう。というのも、少し皮肉的だが、学習者のモチベーションが低下していることを読み取り、自身の関与の方法を変えてくれる——つまり、不適切な関与を減らしてくれる——親切な教師はあまり多くないのではないかと思うからである。

そうした少し違和感を残すこの理論モデルが果たして実証的に妥当なのかを、Netlogoを用いたシミュレーションで検証することができるのだ。前回のクラスの実習では、そこからさらに、もう一つの変数を加えた。それは、被食者が餌とする草の存在である。要するに、草の数が増えれば増えるほど、被食者の個体数が増える、という関係性を新たに加えたモデルを扱っていたのだ。上記のオンライン学習のケースを踏襲すると、草という変数は、被食者の個体数——学習モチベーション——を増加させるものであることを考えると、これはどういったものがあるだろうか？

例えば、学習コンテンツの内容と学習者自身の関心との合致度などを想定することができるかもしれない。要するに、クラスで取り上げるトピックと学習者自身の関心が合致していればしているほど、学習モチベーションが高まる、という関係性である。これは比較的妥当な関係性かもしれない。この

関係性を上記の理論モデルに組み込み、再度シミュレーションをしてみて、その新たな理論モデルが妥当かを検証することができる。

もちろん、シミュレーションによる理論モデルの検証を行うためには、上記のすべての変数を何らかの方法で定量化することが要求される。そして、シミュレーション結果と実際のデータを突き合わせるという作業も要求される。コンピューター上で数値を変更させながら、シミュレーションを何度も行うことと、シミュレーション結果と実際のデータを突き合わせる作業を繰り返し行うことによって、理論モデルの妥当性の検証のみならず、理論モデル自体をより洗練させていくことが可能になる。

今の私に求められているのは、シミュレーションを行うよりも先に、そして、数式モデルを構築するよりも先に、何はともあれ理論モデルを構築することである。新たな日々の習慣に加えたいのは、動的に変動する身の回りの現象を取り上げ、その現象を構成する重要な要素を幾つか抽出し、それらの要素間の関係をもとに、簡単な理論モデルを構築していくことである。こうした理論モデル構築実践を習慣的に積み重ねていくことによって、理論モデル構築能力が高まるのみならず、動的な現象の発達プロセスを理解する力そのものが高まっていくだろう。

580. 発達心理学者アネット・カミロフ=スミスの運命について思うこと

昨日、1970年代後半における構造的発達心理学の状況を理解することのできる論文“The stage question in cognitive-developmental theory (1978)”を読んでいた。この論文は、構造的発達心理学に多大な功績を残したジャン・ピアジェの段階モデルに関する著者のチャールズ・ブレイナードの論考に対して、様々な研究者が短いコメントを残す、というような形式になっている。

そもそもこの論文を読もうと思ったきっかけは、現在、ピアジェが残した仕事を再度辿り、私に影響を与えてきた数々の研究者に影響を与えたピアジェの発達思想をより深く理解したいと思ったことにある。さらには、構造的発達心理学の世界における過去の研究や論争などを把握することによって、自分の専門領域の歴史に対する理解をさらに深めることができると考えたからである。この論文の執筆年代は非常に古いが、コメントを投稿している研究者はそうそうたる面々である。

新ピアジェ派の筆頭格であるジュアン・パスカル・レオンをはじめ、カート・フィッシャー、ジョン・フラベルなどがある。その中でも、私が前々から気にかけていた、アネット・カミロフ=スミス(1938-)という

英国人の女性の研究者がいる。カミロフ=スミスは、もともとジュネーブの国際連合で同時通訳者として仕事をしていて、通訳者として、他者の言葉をそのまま伝えることを続けていく中で、自分の言葉を失いつつあることに気づいたカミロフ=スミスは、キャリアを変更することを考え、大学で再び学問を修めることを決意した。

彼女のエピソードは、私が知性発達科学の世界に飛び込んだエピソードと非常に似ており、強く共感の念を持った。というのも、カミロフ=スミスは、当初精神医学に関心を持っていたそうであり、キャリアを変更する際に、ジュネーブ大学の書店で“P”で始まる精神医学“Psychiatry”のコーナーにある書籍に目を通していたところ、偶然ながら、同じく“P”で始まる“Psychology”のコーナーからジャン・ピアジェの専門書を手にとることになったそうである。

手に取ったピアジェの書籍に感銘を受け、ちょうどその頃、ジュネーブ大学で教鞭をとっていたピアジェのクラスに参加することになったそうだ。そこからの彼女のキャリアについては言うまでもなく、80歳に近づいた今でもなお、現役の研究者として活動している。カミロフ=スミスは、特に幼児や子供の発達を専門としており、脳科学と発達心理学を架橋するような研究も数多く行っており、発達科学に果たしてきた貢献は非常に大きい。そんな彼女も、ジャン・ピアジェという発達科学の巨匠との運命的な出会いがあったのである。

ピアジェから直接学びを得ているカミロフ=スミスは、当時のピアジェの様子を振り返り、「彼はカリスマ的な存在であった」と述べている。ピアジェが心理学と生物学を架橋することによって、発達心理学というフィールドを新たに開拓していった功績を考慮に入れて、多くの発達科学者は、ピアジェのことを心理学におけるアインシュタインだと表している。

それくらい、ピアジェの功績は大きく、彼がカリスマ性を持っていたということもうなづける。数年前のBBCラジオの特集で、カミロフ=スミスの対談インタビューが組まれており、それを聞いた時に、ピアジェのカリスマ性がカミロフ=スミスに伝承されているような感覚を受けた。

今もなお、多くの研究者から注目を集めるカミロフ=スミスは、ピアジェに似たようなカリスマ性を放っていると言える。私の身近な研究者について改めて思いを馳せてみると、カート・フィッシャーにせよ、ポール・ヴァン・ギアートにせよ、独特のカリスマ性を持っており、それらはきっと過去の他の研

究者から伝承されたものなのかもしれない、と思わずにはいられなかった。探究に関する熱量は、人から人へと受け継がれていくものなのかもしれない。そして、系譜を受け継ぐ過程の中では、運命的な出会いというものが、必ず存在しているのだと思わされた。

【追記】

ピアジェの研究にまつわる様々な議論を歴史的に俯瞰するということはとても意味があったと今になって思う。ここからはさらに、上記の論文で取り上げられている研究者の仕事をもう少し丹念に追ってみる必要もあるだろう。彼らの発達思想が持つ共通事項と相違事項に特に注意してみると、様々な気づきが得られるだろう。また、そうした共通事項と相違事項に対する理解が深まることによって、私自身の発達思想がより深いものになっていくだろう。

上記の日記で取り上げたカミロフ=スミスが執筆した論文は特にもう一度全体を通して読み進める必要がありそうだ。BBCでのインタビューを思い出してみると、彼女が発達研究に注ぐ熱気が今この瞬間にも感じられるから不思議だ。これは科学研究だけに限らないと思うのだが、非常に重要な仕事を継続的に行っている人物にはどこか共通の熱気がある。そしてそうした情熱的なエネルギーは、往々にして先人から受け継がれてきたものであることを知る。フローニンゲン:2018/3/25(日)18:12